

京都大学大学院文学研究科/21世紀COEプログラム
「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」

ヨーロッパにおける人文学知形成の 歴史的構図

NEWSLETTER

No. 7

2006/3/30

■ 活動報告

● 国際セミナー

「ヨーロッパ中世における「過去」の表象と記憶の伝承
——領邦・修道院・都市の歴史叙述を中心に——」

**Representing the Past and the Tradition of the Memory in Medieval Europe:
around the historiography of the princely territory, the monastery and the city**

日 時 : 2006年3月11日(土) 午後1時~6時

場 所 : 京都大学大学院文学研究科・文学部 新館大会議室

開会の辞・趣旨説明: 服部 良久 (京都大学大学院文学研究科教授)

基調報告: ペーター・ヨハネク (ミュンスター大学 比較都市史研究所所長)
「中世後期のドイツにおける過去の叙述と表象」
Narrating and representing the past in late medieval Germany

コメント: 徳橋 曜 (富山大学助教授)

「記憶とアイデンティティ——中世イタリアの都市年代記——」

Memory and identity: chronicles of Italian cities in the middle ages

青谷 秀紀 (神戸大学大学院助手)

「君主の記憶、都市の記憶

——中世後期フランドルの歴史叙述と記憶文化——」

Memory of the prince and memory of the city:

historiography and culture of memory in late medieval Flanders

轟木 広太郎 (関西大学非常勤講師)

「中世フランスの歴史叙述——比較の視点から——」

Historiography in medieval France: from comparative viewpoints

国際セミナー「ヨーロッパ中世における「過去」の表象と記憶の伝承」によせて 服部 良久

3月11日（土）午後1時から6時まで、京都大学大学院文学研究科大会議室において、表記のテーマにより、服部良久（京都大学大学院文学研究科）をコーディネータとする「国際セミナー」を開催した。ここではまず本セミナーの趣旨を述べておこう。

「歴史研究」とは意識するとせざるとを問わず、ある現代的な問題関心から過去の事実を選び出し、解釈し、意味づける作業であり、その成果としての「歴史叙述」は、様々なタイムスパンにおいて対象に関する像（イメージ）を構築する行為である。「歴史研究」と「歴史叙述」の関係、とりわけ前者の知的営みとしてのプロセスは、近代に入って大きな変化を遂げたとはいえ、叙述主体の意識と関心に基づく過去の構築という歴史叙述の基本的性格においては、時代を問わず一貫しているといえよう。とりわけ中世ヨーロッパにおける広義の歴史叙述はしばしば、ある種の意図に基づく過去の再構築、あるいは過去の利用という目的性をいっそう顕著に示し、またそれは中世の人々にとって自明のことであった。

中世歴史叙述の最も代表的なスタイルである年代記あるいは編年誌は、キリスト教の救済史的な世界観を大きな枠組みとしつつも、同時にその作者が所属する様々な組織、集団、地域（共同体、領邦、王国）の起源とその正当性を根拠づけるために、それらの過去の叙述を試みた。それゆえ「史料批判」をふまえた厳密な実証を追求する19世紀以来のヨーロッパの「近代歴史学」において、しばしば現実とはほど遠い出自・起源伝説や荒唐無稽なフィクションをちりばめた中世の歴史叙述は、信頼性を欠くテキストとしてそれ自体研究対象とされることはなかったのである。しかしランケ以来のいわゆる「近代歴史学」の営み自体が、19世紀以後の様々な政治的、知的・文化的コンテクストの中に織り込まれた存在である「過去の観察者」（歴史家）の関心に方向付けられており、このこと自体は現代の歴史研究者についても同様である。この点を十分に認識した研究者は、すでに第二次大戦前より、中世歴史叙述への新たなアプローチを試みていたが、戦後、中世の歴史叙述を、それ自体、中世人の多様な歴史意識と政治理念、世界観、思考様式、あるいはアイデンティティを示す「歴史文化」として考察する研究が、ベルナルド・グネらによって本格化した。さらに近年では過去の記憶とその保存、伝承という目的・機能をもつ行為として歴史叙述を、様々なモニュメントやリチュアル、つまり非文字的なメディアとあわせて「記憶の文化」として考えようとする研究が、アメリカのパトリック・ギアリやドイツのハンス・ヴェルナー・ゲッツらによって進められている。

さて中世の歴史叙述が、叙述主体の属す様々な集団のアイデンティティを反映し、またその集団の正当性と権益を擁護する目的性を持っていたことは否定できない。この点を端的に表現するベルント・シュナイトミュラーの論文タイトルを借りれば、そうした歴史叙述は、「現在的手段（目的）によって過去を構築すること」と「組織、家門、民族、共同体を歴史により定礎すること」というパラレルな（あるいは殆ど重複する）二方向の知的作業であったといえよう。であれば、中世における様々な集団、組織（聖俗の）、共同体、国家と密接な関わりにおいて成立する歴史叙述の特質とは、各々いかなるものであったのか、相互にどのような関係にあったのか、さらにある目的のために過去を表象し、伝達する手段としての図像、モニュメントやリチュアルと、テキストとしての歴史叙述は、各々の場において機能的にどのように関連していたか、といった問題が浮かんでくる。その際、ドイツ（神聖ローマ帝国）の帝国都市において顕著な発達を見た「都市年代記」を中心とする歴史叙述は、い

かなる意識を反映し、どのような目的を持つものか、そして都市の公共的空間における非文字的メディアによる歴史の表象と、どのように関わっていたのか、などが論点になろう。この点を、都市以外の歴史叙述との比較、さらにドイツと同様な都市（コムーネ）における歴史叙述の伝統を持つイタリア、領邦歴史叙述が優勢化する低地地方（ブラーバント、フランドル）、歴史叙述においても王国という枠組みが常に明確に現れると言われるフランスとの比較において議論すること、このような議論を通じて、翻って現代の歴史研究、歴史叙述の問題性を再考すること、これが本国際セミナーの目的であった。

基調報告を行ったゲストのペーター・ヨハネク氏は、長年、ドイツのミュンスター（大学）の「比較都市史研究所」所長を勤め、多数の比較都市史に関わる共同研究を組織し、成果を刊行している。また「ドイツ学術振興会」のプロジェクト、「中世からフランス革命に至る時期のシンボリックなコミュニケーションと諸価値」に参加し、コミュニケーションとしての「記憶の文化」に関するいくつかの論文を発表している。以下に要旨を記したヨハネク氏の報告はドイツを中心に、共通の背景としての救済史的歴史叙述、さらに領邦（君主）宮廷の歴史叙述、修道院の歴史叙述、そして氏の主たる研究領域でもあるドイツ中世都市の歴史叙述をとりあげ、スライドを使用して上述の図像やモニュメント、儀礼をも紹介しつつ、中世後期における歴史の表象と伝承を包括的に考察するものであった。

ヨハネク報告に続いて、イタリア中世史を専門とする徳橋曜氏（富山大学）、フランドル・ブラーバント史を研究する青谷秀紀氏（神戸大学：現学術振興会特別研究員）、フランス中世史を専門とする轟木広太郎氏（関西大学非常勤講師）が、以下にその要約を記すコメントを加えた。これに対するヨハネク氏の返答の後、フロアからの質疑応答を行った。議論は識字率の地域的差異と歴史叙述の意義、都市年代記はドイツの特質か、過去の記憶、表象の脆さ、記憶の改変、歴史叙述を生み出すアイデンティティの多様性など多岐にわたった。

基調報告

中世後期ドイツにおける過去の叙述と表象

ペーター・ヨハネク

私たち現代の歴史家にとって過去は現在を説明するための参照枠のようなものですが、中世においてはそうではありませんでした。中世の人たちが歴史に求めていたのは、ひとつには、過去の経験から学び取ることのできる範例であり、ひとつには、権力の行使や制度・共同体の存在を正当化してくれる材料でした。範例としての過去の事実は、たとえば公的生活のなかでどのように振舞ったらよいかを知るための指針の役割を果たしました。

歴史による正当化について、その不可欠な要素となっていたのは救済史でした。救済史とは、神による世界の創造からキリストによる人類の罪の贖い、そして世界の終末にいたる枠組みを持つ歴史観で、普遍年代記や世界年代記と呼ばれる歴史叙述のジャンルを生み出しました。これらの歴史書の著者の主たる関心は、いつキリストの再臨と世界の終末が訪れるのかを年代的に計算することでした。時間の経過は、6つの「時代」や「帝国の移転」というモチーフに沿って説明されました。13世紀には、教皇と皇帝という二つの普遍的権力を併

置しつつ叙述するかなり図式的な世界年代記が書かれるようになります。帝国の歴史はまさに救済の物語が展開する舞台装置としての役割を果たしたのです。ドイツでは、皇帝だけでなくすべての地方や都市にとっても、過去の制度や事実は、それを帝国の歴史あるいは救済史の一部とすることで正当化することができたのでした。

ところで、中世後期になると世界年代記にはきわめて重要なある特徴が現れます。それは記述と並んで、重要な事実を図表にして示すという傾向です。とくに 15 世紀後半のカルトゥジオ会士だったヴェルナー・ローレンヴィンクはこの表現方法を完成の域にまで高めた人物でした。資料に示したヴェルナーの世界年代記の 1 ページでは、ノアとその息子たち、そして神と人類の契約を象徴する箱舟と虹の絵が描かれています。またこの絵の上の方には世界の創造以来の年数が、下の方にはキリスト誕生までの年数がそれぞれ示され、さらに二重線で結ばれて時間の流れを表すようになっています。

このように中世後期の世界年代記に言葉による表象と並んで、図表、イメージ、シンボルといった視覚的表象が現れたことは重要です。というのも、歴史伝承が効果的に正当化の目的を果たすためには、歴史の表象が公的なコミュニケーションの場に現れねばならず、それには視覚的表象の役割が不可欠だったと考えられるからです。中世の社会生活の中核的要素をなす記憶（メモリア）文化のなかでも、モニュメント、彫刻、図像、紋章など、歴史的意味を担うヴィジュアルな媒体の役割が強調されました。

次に、さまざまな領域の歴史伝承に話を移しましょう。まず、帝国の世俗領邦では過去の歴史はどのように表象されたでしょうか。領邦君主の宮廷に由来する歴史作品のテーマは、第一に君主家門の系譜を作成することでした。系譜によってその家門が高貴な出自を持ち、はるかな昔から権力を揮う地位にあったことを正当化することができたからです。第二は君主の事蹟を称賛することでした。こうして宮廷の修史官は君主の栄光を後世へ伝えることができました。たとえばハプスブルク家をはじめとして、コロンナ家などのイタリア貴族に祖先を遡らせる家門がいくつかありました。ボヘミア南部のロジュンベルク家などは、ローマ人の祖先の記憶を喚起するために居城の堀に熊を飼っていました（ローマの名家オルシーニ家 Orsini の名は、ラテン語の *ursus* 「熊」からの派生語です）。

このように高貴な出自と家系の連続を示すことが、領邦君主にまつわる歴史伝承にみられる一般的特徴でした。しかもそれは叙述によるだけでなく、シンボリックな媒体によってもなされたのです。オーストリア大公家は、言葉によるコミュニケーションとシンボルを使ったコミュニケーションの結合のじつに印象的なケースです。14 世紀半ばに大公付きの礼拝堂司祭レーオポルトが書いた『95 の権力者の年代記』は、家門の祖先を、トロイア人やローマ人よりも古いユダヤ人のアブラハムに求めています。そして後にフリードリヒ 3 世は、ヴィーナー・ノイシュタット城内の礼拝堂の外壁を、歴代オーストリア大公 95 人の紋章で飾ったのでした。

二つ目に取り上げるのは、修道院における歴史伝承の形成についてです。修道院の場合に正当化ということで重要だったのは、聖人、支配者、あるいは貴族家門による創建の歴史、

いわゆる *fundatio* でした。したがって修道院の年代記は同時に、創建者一族の歴史ともなりました。こうした創建者一族と修道院との結びつきの歴史も、言葉とシンボリックな媒体の両方によって表象されました。その最も興味深い事例は、ドイツ最初のプレモントレ会修道院カッペンベルクでしょう。この修道院の創建者はカッペンベルクのゴットフリートとオットーでした。二人はシュタウフェン家と大変近い関係にあり、オットーはフリードリヒ・バルバロッサの代父でした。カッペンベルクの参事会員は創建者を記念する『ゴットフリート伝』を著し、また彼の図像を刻んだ墓石を建てました。フリードリヒ・バルバロッサもこの修道院で記念されることを望んで、自分の洗礼を描いた銀製のプレートと人間の頭の形をした黄金の聖遺物匣を贈呈しました。フリードリヒ自身を模したと思しきこの聖遺物匣は、創建者の命日には、墓石に刻まれたゴットフリート像の右手に握られた十字架の上に置かれたようです。こうして修道院と皇帝との密接な結びつきが印象的なかたちで示されたのでした。

三つ目のテーマは都市の歴史記述です。ドイツの都市、とくに帝国都市はほぼ自立した政治体であり、何より自由をアイデンティティの基盤としていました。その自由は、皇帝や領邦君主から与えられた特権に由来するもので、その自由を外部の領邦君主や貴族から防衛するというテーマは、都市年代記にもっともよく登場するタイプのものでした。ほかに都市のアイデンティティの重要な要素として「市民の融和」がありました。ここでも言葉による表象と言葉によらない表象が組み合わさった事例を挙げることができます。

シュヴァーベン帝国都市ウルムの『都市ウルムについての論述』（1480年代）では、市民たちが一致団結して新しい教区教会の建設のために結集したという出来事がメインテーマのひとつとなっています。この出来事は年代記だけでなく、完成した教会に置かれた二つのモニュメントによっても記念されました。そのひとつは、市長夫妻が聖母マリアに教会の模型を手渡している彫像で、もうひとつは、市長夫妻が石工親方に支えられながら教会の模型を捧持している彫像でした。

最後にヴェストファーレンの帝国都市ドルトムントを取り上げましょう。この都市の場合、都市レベルにとどまらず、地方全体のアイデンティティに関わる歴史伝承が生まれました。ドルトムントの歴史は、ヴェストファーレンのかつての征服者カール大帝と結びつけられたからです。またカールの甥とされた聖レイノルドゥスに関わる伝承も重要でした。レイノルドゥスの聖遺物はドルトムント第一の教区教会に祀られ、彼は都市の守護聖人となりました。16世紀半ばの都市年代記では、ドルトムントが都市の自由を脅かす外敵と繰り広げたフェーデのなかで市民を守護するレイノルドゥスの活躍が描かれました。またその様子を表象する像が市壁の上に建てられたのでした。

以上、集団的な歴史の記憶ということで、領邦君主の宮廷、修道院、都市社会と見てきましたが、そのすべてにおいて言葉による表象と言葉によらない表象が、独自の形で結合され活用されてきたのです。中世後期から確認できるこうした状況は、16世紀にも続いてゆくこととなります。

（要約：轟木 広太郎）

1. Chronicles and chroniclers in cities in the northern and central Italy

カロリング朝断絶以降、イタリアには明確な統一権力が存在しなかった。オットー 1 世以来、北イタリアは帝国の一部と位置づけられたが、それは必ずしも実体を伴わず、自治権を獲得した都市（コムーネ）は、あたかも都市国家の様相を呈するものになった。かかる政治的社会的状況が人々の目を都市に向けさせ、歴史叙述に影響を及ぼした。歴史叙述は都市の過去を記し、その現在を称揚するものとなったのである。

13 世紀のアダムのサリンベーネやボンヴェシン・ダ・リーヴァに見られるように、歴史叙述は聖職者によって担われることもあったが、次第に都市政府や市民の手に移った。その最も早い例の一つは、ジェノヴァの有力市民カップファロ（1080 頃-1166）の『ジェノヴァ編年記』である。この作品は都市政府に献呈された後、正史として認定され、1293 年まで継承された。また、こうした正史とは別に、サンツァノーメの『フィレンツェ人事績録』（13 世紀）やヴェネツィアのドージェ、アンドレア・ダンドロの年代記（14 世紀）のように、個人の手になる年代記も現れる。さらに重要なのは、13 世紀以降、年代記が俗語で書かれるようになることである。フィレンツェでは 13 世紀後半に、マリスピーニの『フィレンツェ史』が書かれている。14 世紀にはコンパーニの『年代記』やヴィッラーニの『年代記』（共にフィレンツェ）、セルカンピの『ルッカ年代記』、あるいはコーラ・ディ・リエンツォの同時代のローマの匿名作者の『年代記』など、多くの俗語の年代記が生まれた。

俗人の年代記作者達は都市のエリートであり、多くは商人であった。彼らは元々、仕事上の必要から識字能力を身に着けたが、その能力をもって自らラテン語や俗語の都市年代記を記したのである。このように私的に書かれた年代記の流布は、共通の理念や記憶が世代を超えて継承されるうえで、重要な役割を果たしたと思われる。

2. The World and the city: Florentine civic identity in chronicles

都市年代記の叙述は市民のアイデンティティと結びついており、コムーネとしての歴史・文化・政治への誇りをそこに見出せる。他方、ドイツと同じくイタリアにおいても、世界年代記の伝統が都市年代記に流れ込んでいた。マリスピーニの年代記はバベルの塔の建設と崩壊から始まり、トロイアの建設、イタリアへ逃れたアエネイアスの子孫によるローマ建国、共和政末期のローマ人によるフィレンツェの建設へと至り、さらに中世前期の長い叙述があった後に、作者の同時代の歴史が叙述される。この叙述の系譜は『アエネイス』に見られるローマ建国神話に遡るが、マリスピーニがローマの年代記に倣って叙述したと記しているのは興味深い。同時に、都市の権威や正当性の源泉を古代ローマに求める論理には、12～13 世紀に勃興した「ローマ理念」が影響していると考えられる。

ヴィッラーニも同様の論理と記述を用いている。彼は先行するラテン語の年代記を参照したらしい。歴史叙述の伝統はこうして、市民の間で私的に継承されたのである。識字率の高いイタリア都市社会においては、市民が「書かれた歴史」の伝統や特定の歴史的理念に接することは容易であった。我々の知るフィレンツェの年代記作者達の多くは、個別に歴史を書きながらも、共通した歴史的理念と叙述スタイルを持っている。但し、個々の作品は必ずし

も私的に流布したとは限らない。ヴァチカン図書館所蔵のヴィッラーニの年代記の彩色写本（14世紀後半）は、政府がこの作品を公認し、公費で写本を作成した可能性を示唆している。識字能力を持った市民達はこうした年代記や文学作品を読み、ラテン古典にも接していた。年代記を書き始める前にリウィウス等の古典を読んだと、ヴィッラーニは述べている。このように古典への強い関心と知識が存在したことは、歴史叙述に大きな影響を与えたであろう。

3. Historiography and interpretation of the past

しばしば指摘されるように、中世の年代記作者は歴史に神の意思を見出し、それ故に世界の歴史と都市の歴史とを連動させて考えた。しかも、神学や占星術について専門的知識を持っていた訳ではなかったため、史実を独創的に解釈する代わりに、周知の文脈の中で解釈したのである。13～14世紀のイタリアはグェルフィズムとギベリニズムの間で揺れていたが、こうした現実の問題が都市のアイデンティティや過去の解釈にも反映した。例えば、13世紀末～14世紀中葉のフィレンツェは、グェルフの都市であることを標榜していたが、年代記作者達はこの理念的枠組の中にフィレンツェの正当性を位置づけてみせた、そこでは「ローマの娘」として古代ローマから継承した正統性が、教会の支援者としての正当性の主張と共存している。

過去から現在を読み解こうとする叙述姿勢は、14世紀の間に変化した。1380年頃に書かれたマルキオンネ・ディ・コッポの『フィレンツェ年代記』は、世界の始まりから説き起こしつつも、1340年以降の内政動向を論じることに力点を置いている。15世紀の年代記作者達はいつそう、特定の時代の政治と社会を論じるようになった。これを人文主義的姿勢と言うべきであろうか。少なくとも古典研究によって、過去を現在から切り離して理解する姿勢が生まれたことは、確かである。歴史叙述の目的は過去を分析し、現在に益する教訓を得ることに向けられた。歴史は改めて「人生の師」^{マギステラ・ヴィタエ}として捉えられたのであった。

コメント 2

君主の記憶、都市の記憶

——中世後期フランドルにおける歴史叙述と記憶文化——

青谷 秀紀

本コメントでは、ヨハネク氏が取り上げた出自神話と歴史意識の問題、そして紛争の記憶と都市アイデンティティの問題に論点を絞り、中世後期フランドル地方の具体的な事例を取り上げることで比較的考察のための視座を提示するよう試みた。そこから得られた本コメントの要点は、つぎの二点に分けられる。まず、特定の時代、特定の地域に存在する歴史意識や歴史的アイデンティティは、必ずしも単一のものに回収されえず、その核をなす集合的記憶や歴史的表象もその意義づけをめぐる諸々の社会集団による複数的な解釈に曝されたのではないかという点。そして、集合的記憶はしばしば社会集団のアイデンティティ形成に貢献するが、それだけにいつそう、そのアイデンティティを崩壊へと導こうともくろむ他者から攻撃の標的とされることもあり、しばしばその記憶は塗り替えられうる脆弱性をもつものであったのではないかという点である。

中世後期のフランドル史を特徴づけるものとして、君主による中央集権主義と都市自立主義の対立があげられるが、こうした対立はそれぞれの側の歴史意識や歴史的身份のレベルにおいても確認しうる。フランドルでは君主家系の系譜を軸とする領邦年代記が記され、ここでは君主の側から定義されたフランドル人の歴史的身份が提示されている。しかし、歴史叙述の形をとることはなくとも、ヘントをはじめとするフランドルの各都市においては、都市の建立伝説を核とした各都市固有の複数の歴史的身份が存在していたことも確認できる。さらに、そうした社会集団が有する歴史的身份を突き崩し、イデオロギーのレベルから支配を浸透させてゆくために、その歴史的身份の核となる集合的記憶や歴史的表象のアプロプリアションが試みられ、記憶や表象がしばしば複数の解釈に曝されることもあった。この点については、都市ヘントの建立者ガイウス・ユリウス・カエサルの表象がたどった道程から明らかになる。13世紀末以降、カエサルが都市ヘントの建立者であり、その古い都市名ガンダがガイウスという名前に由来するとの説がヘントの周辺で成立する。しかし、これと並んでカエサルの表象は、15世紀には君主によるヘントへの入市式において、反乱都市に赦しを与える絶対的な君主の相貌も帯びるようになる。そして、ついには1540年の皇帝カール5世による都市ヘントの破壊を正当化する言説に、フランドル人の祖先と考えられたガリア人を征服するカエサルの姿が持ち出されるようになる。カエサルの表象は、このように君主の側と都市の側において異なるものとして受容され、用いられたのである。そして、この表象こそが君主絶対主義と都市自立主義の対立が火花を散らす争点となったのであり、その歴史的な解釈・意義づけを独占することがヘゲモニーの確立をもたらすことになるのであった。

社会集団の間での絶えざる紛争に見舞われた中世後期のフランドルにおいては、出自神話はこのように各社会集団において複数のものとなりえたのであり、これらはときに激しくせめぎ合いつつ、並び立っていた。また、その歴史的身份の核を担う記憶や表象も、支配の貫徹を目指した社会諸集団の間における複数の解釈の争点となりえた。ただし、こうした複数性は、フランドル史において極端な形で顕現するにしても、フランドルに固有のものではなかったはずである。フランドルに隣接するブラバント公領は帝国領に属するが、ここでも13世紀以来、公家のトロイア人出自神話と白鳥の騎士の出自神話が競合的な形で存在していたことが確認できる。権力や共同体存在の正当化と過去の表象の関連を問う場合、こうした歴史意識や歴史的身份の複数性、そしてその核を担う集合的記憶や歴史的表象をめぐる解釈の複数性にも目を向ける必要があるだろう。そして、こうした複数性のうちに、各地域固有の社会構造や政治文化のあり方を見出すことも重要な意義をもつだろう。

第二の点として、中世後期のフランドル地方を見舞った紛争の事例を取り上げ、紛争とその記憶が、ヨハネク氏の指摘するように常に都市身份の形成に持続的かつ積極的な機能を果たすのみならず、他者からの攻撃に曝され、しばしば塗り替えられうる可能性も有していたことを指摘した。1302年のコルトレイクの戦いは、フランドル市民軍がフランスの貴族軍を打ち破った戦いとして知られているが、この戦いを記念して都市コルトレイクでは例年祝祭が行われていた。都市民にとってこの戦いの勝利の記憶を祝祭で更新することは、そのまま都市身份の更新を意味していたのである。しかし、今度は1382年にフランドル市民軍を打ち破ったフランス王がこの祝祭の存在を耳にし、過去の忌まわし

い記憶を抹消するために都市コルトレイクを破壊することになった。また、1438年に都市ブルッへの反乱を鎮圧したブルゴーニュ公フィリップは、都市においてもっとも重要な社会的・経済的機能を担い自由の象徴となっていた市門を閉鎖し、家臣の死を記念する礼拝堂に作り変えることで、ここに政治的勝利の痕跡を残そうとした。このように、都市の自由やその存在を歴史的に正当化する記憶は、その輝きが華々しいものであればあるほど、他者からの攻撃に曝されやすく、上書きされる可能性をもったのであり、紛争の焦点となることもあった。紛争の記憶は、たしかに都市アイデンティティの形成・強化に積極的な意味をもつこともあったにせよ、常に他者による塗り替えや上書きを被る危険性を伴っており、こうした事例に示される記憶の脆弱性にも注意を払う必要があるのではないだろうか。

複数の社会集団が各自の利害を主張し、頻繁に激しい紛争に発展することもあった中世後期フランドル地方の歴史を振り返るならば、以上のような指摘が可能である。

コメント3

中世フランスの歴史叙述——比較の視点から——

轟木 広太郎

私のコメントの課題は、中世フランスの歴史叙述のいくつかの特徴を、ドイツとの違いに重点を置きながらまとめることにあります。

まず系譜叙述について述べましょう。フランスでは、11、12世紀のノルマンディー公、アンジュー伯、ギーヌ伯、アルドル領主の系譜叙述などがよく知られております。そのなかには、遠い異国からやってきて、征服や婚姻によりある土地に定住した冒険者が祖先とされる事例がみられます。こうした祖先神話は、救済史や帝国の歴史とは異なる時間の枠組みを下敷きにしているという点で注目に値します。時間の流れは家門の継承という枠組みの中にはめ込まれており、帝国の運命はストーリーの必然性を支える要素として不可欠とはなっていないからです。系譜を著すということは、個々の祖先の偉業や栄光を称揚したり、高貴な血を持つ先祖を探り当てたりすることであって、必ずしも普遍的な歴史の計画に加わらなくてもよいわけです。それは、歴史叙述の一種の世俗化でした。

ところで、フランスの系譜叙述にもトロイア人起源説が見られます。ただしここでは、アエネイスとは別のリーダーが率いる集団が存在し、それがパンノニアに逃れて都市を建設し、次いでゲルマニアに移り、最後にガリアに到達したことになっています。11世紀初頭のサン・カンタンのデュドンの著した『ノルマンディー公の歴史』がその代表例ですが、トロイア人起源説はカペー家の系譜叙述にも取り込まれます。カペー家のサークルは、王家と王国の住民がトロイア人の子孫であることを主張することによって、帝国の普遍的権力にひけをとらない自分たちの伝統を証明できると考えたのでした。

次にフランスの特徴として、王権にまつわる歴史叙述が際立って豊富だという点が挙げられるでしょう。11世紀前半以降、北フランスではカペー家に関わるある予言が流布しました。それは、聖人ヴァレリーがユグ・カペーの幻視のなかに現れて、彼が近々王座を手にし、その後継者が7代まで王国を統治するだろうと予言したというものでした。この予言はカペー家による王位篡奪を正当化する一方で、その王統がいずれ尽きることを告げる不吉な

ものでもありました。しかし12世紀末、マルシエンヌのアンドレによってそこに重大な変更が加えられます。彼は、もし王太子ルイ（将来のルイ8世）が王位を継承すれば、再び王国はシャルルマーニュの血統に帰ることになる、と述べたのです。この意味するところは、カペー家の8代目にあたるルイが、母親のイザベル・ド・エノーを通じてカロリングの血筋につながり、思いもよらぬ形で予言が成就するだろうということでした。

このような歴史叙述の展開は、国王サークルのなかに予言の成就に対する危機感が募っていたからではなく、むしろちょうどこの時期、つまりフィリップ・オーギュストの治世に、血統による王位継承、また長子相続制の考え方が王家を含めた貴族層に広く共有されるようになったことが背景にあると思われます。つまり、途切れることのない王位継承という観念が定着したため逆に過去の血統への関心が高まり、このような叙述を生んだと考えられるわけです。

また先に、トロイア人起源説が帝国の歴史との対抗という点でフランス王権にとって重要だったと述べましたが、それはフランスの王統が連綿と続くということを証明することでもありました。とくにフィリップ4世のサークルは、普遍的権力である教皇権との対抗関係のなかでこの歴史観にしきりに喧伝しました。このような王統の連続性と血統による継承へのこだわりは、選挙制の原理に立つドイツ王権との大きな違いではないでしょうか。

第三のテーマは都市の歴史叙述についてですが、フランスはこの点では、ドイツやイタリアに比べて著しく貧困でした。しかし、トゥールーズ、モンプリエ、ル・ピュイ、リヨン、メッスなど、南部・東部の都市には、都市年代記の萌芽を認めることができます。興味深いのは、こうした叙述の起源が行政文書への書き込みなどにあったことです。たとえばトゥールーズでは、毎年選出される統治行政官のポートレートと簡単な人物紹介を含む「おおよけの書」がありましたが、次第に都市で起こった重要な出来事が書き込まれるようになり、16世紀初頭には年代記と呼ぶに相応しい体裁へと発展してゆくことになります。

王都パリでは、15世紀前半に書かれた無名のパリ市民、そしてともにパリ・パルルマンの書記だったクレマン・ド・フォーカンベルグとニコラ・ド・ブレイの三者の日記が有名です。これらについて目を引くのは、著者が自分の家やその家の伝統についてほとんど何も述べていないことです。ドイツの都市年代記で、多くの著者が自分の家の歴史に関心を持ち、それを都市および帝国と関連づけているのとは対照的な状況がみられるわけです。

最後に国王入市式を取り上げましょう。ヨハネク先生は歴史の表象による権力や制度の正当化という論点を提示されたわけですが、過去の表象と権力の行使が現実の場でどのように直接にリンクしていたのか、という点も重要ではないでしょうか。そのもっとも典型的なケースのひとつは、国王入市式です。入市式は、即位後の国王の最初の都市入場や、戦争での勝利、反乱の鎮圧の後などの機会に催されました。その際には、大々的なパレードや宗教劇などさまざまな出し物があり、その後国王が裁きを下したり、特権を付与・確認したり、都市から供出金を受け取ったりしました。つまり入市式は、国王が至高の権力を揮う瞬間でもあったわけです。ところでフランスでは、入市式の出し物のなかに、過去の表象の活用として、たとえばクローヴィスの塗油の場面を表した絵画や、歴代フランス王の系譜の展示がありました。過去の国王の事績や系譜の表象は、その後に顕現することになっていた国王権力のいわばプロローグのようなものだったのです。市民は、国王の裁きや恵与の背後に、連綿と続く伝統の裏づけを読みとるよう求められたのでした。入市式は、過去の表象と権力の行使とが現実には結合する場だったと言えるでしょう。

■ エッセイ

ユマニテの国での史料調査

上垣 豊（龍谷大学法学部教授）

今年の2月23日から3月11日にかけて、COEプログラムの研究成果報告書作成のため、フランスで史料調査を行い、その合間を縫ってフランス人研究者、教師と会って話すことができた。ここで紹介するのは、ユマニテ、歴史学、フランスの高等教育に関する対話の一端である。予想はしていたが、ユマニテ（古典人文学）の伝統の強さにあらためて驚き、フランスと日本との人の育て方の違いを思い知らされた今回の旅であった。

紙数も限られているので、パリ第一大学のクリストフ・シャルル Christophe Charle 教授との対話を中心に紹介することにしよう。シャルル氏は第三共和政のエリート研究、高等教育史の研究で知られ、社会学者ピエール・ブルデューを師とあおぎ、モーリス・アギュロンのもとで学位論文を仕上げ、多くの著作を公刊している。まさに、「疲れを知らぬ研究者」「筋金入りの歴史家」（Madeleine Rebérioux）である。現在は近現代史研究所の所長もかねている。

ウルム街の高等師範（研究所は高等師範の建物の中にある）の一階入り口で落ち合ってから、ムフタール通りにくんだり、一緒に昼食をとることになった。私は昨年夏に行われた COE シンポジウムの報告書を手渡して、今回の訪仏の目的を告げた。その後、私の質問に対して氏は、「これはちょっとした講義になるね」と言いながら、丁寧な答えてくれた。

私の質問は三つあり、その一つは歴史学の学問世界のなかでの地位と 1903 年のシャルル・セニョボス Charles Seignobos とフランソワ・シミアン François Simiand の論争に関するものであった。シャルル氏は歴史学が 19 世紀の早い段階ですでに支配的なディシプリンの地位を占めるようになった事情を説明してくれた。19 世紀のフランスは大革命をどう理解するのか、フランス革命によって生じた対立、亀裂をどのように克服するのか、過去や伝統とどう結びつけるかが課題となり、そのため歴史学が重視されるようになった。フランソワ・ギゾー、アドルフ・チエールなど歴史に関心をもち、歴史に関する著述を書いた政治家は少なくなく、こうした伝統は 20 世紀に入っても続いている。アメリカは過去から逃げた人々が作った国であるが、フランスはほとんど外国への移民を出さず、過去や伝統が重きをなす国である。ところがフランス革命のような大事件が起き、過去との断絶が生じたために、新たに生じた事態を過去や伝統のなかに位置づけなおす役割が歴史学に求められたのである。フランス革命をめぐる生々しい論争が終息するのに 150 年かかった。それでももう終わったかと思ったら、二百周年が近づくと再燃した。ナポレオンのような人物への崇拝がなくなるのは百年かかった。植民地支配の問題もそうだ。最近ある法律に植民地支配の積極的な側

面があるという文面が盛り込まれ、議会内外で大きな論争があった。アルジェリア問題は当事者がまだ生きているだけに、生々しい問題である。しかし、シャルル氏は、時間をかければフランス人がこうした対立を克服することが可能であると確信をもっているようであった。また、この事業に参加する歴史学者、知識人としての誇りに氏の顔は輝いているように見えた。

続いて1903年のセニョボスとシミアンの論争に関わって、当時の歴史学と社会学の関係について質問してみた。これに対して、シャルル氏は、当時も現在も歴史学と社会学は分離していると大学界の状況をまず説明した。当時社会学は被支配的なディシプリンであり、デュルケームらのグループは支配的なディシプリンである歴史学に対して力関係を変えようと挑戦を試みたものである、と論争の背景を説明した後、きわめて厳しいデュルケーム学派の社会学批判を行った。社会学者は一般に歴史事象の特殊性を考慮しようとせず、知る限りでは歴史的な偶然性、個別性への理解があったのはピエール・ブルデューただ一人である、と述べた。ある程度予想はしていたが、思っていた以上に厳しい社会学批判が語られたので、私はかなり驚いた。

さらに、フランスではフランス革命以後も長い間古典人文学が教育のなかで中心的な役割を果たしてきたのはなぜか、フランス革命後のブルジョワジーが古典人文学を尊重したのはどうしてか、とたずねた。このきわめて素朴な質問に対して、シャルル氏は、そもそもフランスは十分文明化されており、日本のように先進国に追いつくために応用科学をことさら重視する必要はなかった、と述べた。それから、フランス革命以後のフランス中等教育の歴史を要約的に解説した。その説明は通説にしたがったものであったが、フランス革命期の中央学校の失敗の後、その反動としてのイエズス会流の古典人文教育の復活を肯定的に述べたことが印象的であった。フランスは1960年代まで古典人文教育が重視されており、シャルル氏自身もリセでラテン語、ギリシア語を学んだ世代である。氏は、英語、ドイツ語、イタリア語を話すことができ、スペイン語、ポルトガル語は話せないが、フランス語とはラテン語が共通の基層になっているので話されていることはだいたいわかるとのことであった。

三番目はアグレガシオンについての質問である。アグレガシオンは中等教育のエリート教員になるための資格であり、同時に大学教員（とくに文学部）になるために必要な資格としても機能してきた。アグレガシオンは特殊フランス的なものであり、一部にはEU統合のなかで存続を危ぶむ声もある。アグレガシオンの将来について私が訪ねたところ、シャルル氏は改革は必要だが、維持されるべきだと明確に述べた。そしてフランスとは違い、ドイツの高等教育は中等教育と分離しており、その点が問題だと指摘した。ドイツの大学教授はいくつかの講演はできるだろうが、一年を通じての講義が果たしてできるのだろうか、といぶかしがっていた。

パリを出て、私はリヨンの国立教育研究所（INRP）図書館で史料調査を行った。泊まったホテルの前にはフランソワ・ラブレーが医療に携わっていた施療院がある。週末を利用して、旧知の間柄のシャンベリに住むサヴォワ大学名誉教授パリュエル-ギヤール André Palluel-Guillard 氏に会いに行った。パリュエル氏はナポレオン研究の大家 Jean Tulard の弟子であり、同時に長年地方史研究をリードしてきた人物である。祖父の代から三代続く共和国の教師の家系であり、自身も大学教員になる前にはリセの教師であった。

パリュエル氏は、ユマニテの教育の目的を、「上手に、理路整然と、はっきりした発音で話す bien parler, bien raisonner, bien articuler」ように教育することだと要約してくれた。現在でも、貴族の間で話す時は正しいフランス語を話さないと響きを買わない。パリュエル氏が貴族の集まりで講演をした時、途中でフランス語の誤りをおかすと、その瞬間冷たい視線を浴び、その後は白々とした沈黙が続いたという。現在ではラテン語教育はずいぶんすたれてしまったが、それでも、最近になって理工科学校ではユマニテの再発見がおこった。リセでラテン語教育がされなくなったので理工科学校でラテン語教育を補うことになった（リメディアル教育のフランス版か?）。話題は政治家の話す言葉にも及んだ。フランスで右派が左派よりも選挙で強い要因のひとつは、ドヴィルパン（彼は貴族である）やシラクのように、右派の政治家の演説のうまさであるらしい。

シャルル氏とは認識が異なるが、パリュエル氏は、現在ではアグレジェがリセの教師になることが稀になり、中等教育と高等教育が分離してしまい、フランスのよき伝統が過去 20 年間でなくなってしまったと昔を懐かしんでいた。また、アメリカではかつてフランスの歴史学の大学教授はどんな時代の歴史もよく知っていることで有名であったが、最近ではそういう博識の歴史学者は珍しくなったと慨嘆していた。

長年リセの準備学級の教師をしていたピエール・ベリエ Pierre Berrier 氏にも触れておきたい。ベリエ氏はパリュエル氏の大学時代の友人で、ともにアグレガシオンの試験勉強をした仲間である。ベリエ氏は学位論文を準備していたが、ついに完成できず、リセ教師の道を選ぶことになる。ベリエ氏の博識にはしばしば舌を巻いた。準備学級で日本の歴史を教えたこともあり、日本の事情にもずいぶん詳しい。三年前来日した時は、靖国神社も見学したそうだ。小泉首相の靖国参拝や日本の戦争責任の問題はシャルル氏との対話でも、パリュエル氏との雑談の中でも出てきた。いつもは温厚なパリュエル氏がこの問題に触れる時に見せる厳しい顔つきは忘れることができない。

グローバリゼーション、EU 統合の中で、フランスの大学も変容を強いられている。だが、今回の出張ではユマニテあるいは歴史学がいかにか社会の中に根づいているのか、あらためて認識させられた。フランス人、すくなくともフランスの大学人はユマニテについて語るのが好きなのだ、ということがよくわかった旅であった。

■ ご挨拶

研究会「ヨーロッパにおける人文学知形成の歴史的構図」を終えるにあたって

2004年4月から2年間にわたって活動してきました「ヨーロッパにおける人文学知形成の歴史的構図」研究会は、この3月をもって個別研究会としての活動を終えることになりました。この間、大学院生から学界の大先輩に至るまで、数多くの研究者の方々にお力添えをたまわり、厚く御礼申し上げます。海外からも研究者を招いてシンポジウムや講演会などをいくども開催でき、個別研究の進展はもちろんのこと、国際交流や若手研究者の留学準備にも大いに寄与しえたことと自負しております。

4月からの京大文学研究科COEプログラム最終年度においては、この研究会活動の成果を1冊の論集にまとめて出版することが大きな課題です。来年春の出版予定ですので、どうか御期待ください。また、他の研究班と合同で、9月25日に英国ケンブリッジ大学の古典学部において、古典学と哲学に関する国際シンポジウムを開催することも、たいへん重要な課題です。これに関しては、私自身が昨年からの準備をしておきました。ポスターや専用ホームページ (<http://www.hmn.bun.kyoto-u.ac.jp/ihrpc2006/index.html>) も開設しており、シンポジウム当日ばかりでなく成果出版まで、ぜひ成功させたいと願っております。本ニューズレターの読者で9月下旬に英国に御滞在の方がおられましたら、ぜひケンブリッジ大学古典学部の会場を覗いてみてください。よろしく願いいたします。

研究会リーダー 南川高志

《後記》

厳しい寒さも終わり、ようやく桜の季節となりました。皆様におかれましては、お変わりなくお過ごしのことと拝察申し上げます。ニューズレター第7号をお届けいたします。

ジョン・パタソン博士講演会ならびに国際セミナーには、多数のみなさまにご参集いただきました。心よりお礼申し上げます。

本研究会のニューズレターは、本号をもって最終号となります。第5号から編集を担当させていただきました。拙い編集作業でしたが、みなさまのご助力によって、何とか最終号までお届けすることができました。読者、執筆者、諸先輩の方々に、篤く感謝申し上げます。(阿部)

EUROHUM 研究会事務局

〒606-8501 京都市左京区吉田本町

京都大学大学院文学研究科西洋史研究室(担当:阿部)

Tel/Fax : 075-753-2791

E-mail : eurohum-hmn@bun.kyoto-u.ac.jp

URL : <http://www.hmn.bun.kyoto-u.ac.jp/eurohum/>
